

「二」次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

さて、国の体制が整ってくると、①や^②はり^③どうしても浮上して^④くるのが文字の問題でした。いまもお役所というところは、大半が文書をつくる仕事になっていますが、それは昔からのこと、当時も法律や人事を決めるには文書通達が必要でした。しかし、日本には独自の文字がない。そのため、さきほど話したように、当時の日本はそれを中国から仏教とともにやってきた漢字に頼るしかなかったんです。

かくて古代日本国家は法の体系や行政制度そのものを中国のしくみになら^⑤つてつく^⑥つていたことになりました。また、日本の中枢を担う人材が、中国人さながらに漢文を書くことのできるエリート官僚たちで固められていくわけです。

そうすると、中国の社会や文化こそが正当なものである、②「真」なるもので、それに対して日本の社会や文化は「仮」のものである、という通念がだんだん定着して^⑦い^⑧つて^⑨しま^⑩う^⑪ん^⑫です^⑬ね。この中国至上主義みたいな考えかたは、その後、長いあいだ、なんと江戸時代の初期まで続いていきます。これを中国から見^⑭て「中華思想」とか「※華夷秩序による思想」といいます。

近頃の日本が、国際化だ、グローバル化だとい^⑮つて、やたらと英語の読み書き能力を気にしたり、英語を第二公用語にしようとして^⑯たりする^⑰のもど^⑱こ^⑲か^⑳似^㉑て^㉒い^㉓ま^㉔す。こ^㉕う^㉖い^㉗う^㉘日^㉙本^㉚は^㉛ア^㉜メ^㉝リ^㉞カ^㉟至^㊱上^㊲主^㊳義^㊴で^㊵す。

③でもじつは古代から江戸時代までの日本人の多くは、中国風でいくところと、日本風でいくところをきちんと使い分けていたんです。そこが今日の英語偏重やアメリカ偏重の考え方とはぜんぜんちがって^㊶い^㊷た。

中国の漢字を使ったとい^㊸つて^㊹も、その漢文を中国語のように読ま^㊺な^㊻か^㊼つ^㊽た^㊾ん^㊿です。あくまで日本語の音で読み下したわけ[㋀]です。熟語も日本風に読みました。

儀式や調度も中国風と日本風を使い分けました。たとえば、政治は中国風のデザインの朝堂院というところ[㋁]でやる。屋根は瓦葺きで床は石畳、椅子とテーブルで執務をするというのが当時の朝廷の様子[㋂]でした。ちなみに「朝廷」というのは、朝の時間帯にまつりごと、A政治上の会議や決裁をやったところからきている言葉[㋃]です。B「朝」という字がついて[㋄]い[㋅]る。「王朝」というのも同じこと。こ[㋆]っ[㋇]ち[㋈]に[㋉]も「朝」がついて[㋊]い[㋋]る。

これに対して、貴族のプライベートな生活の場は、檜皮葺と高床式の白木による純和風の空間で、床に直接座するというスタイルになります。こちらは「内裏」といって、「朝廷」に対して夜の世界を司る場所でした。

【中略】この「内裏」でこそ、日本は中国経由ではない独自の日本の文化を育んでいったんです。なかでももっとも盛んだったのが「和歌」でした。五七五七七の三十一文字で、季節のうつろいとか男女の恋とか人の生死を歌う、あの和歌です。

こうして、朝廷では漢字能力が必須でしたが、内裏では「和歌」の能力が求められていったんですね。いまでも「短歌」をやっている日本人はものすごく多いし、同人誌とか結社は全国にあります。奈良・平安時代の日本人にとって、和歌は今日の私たちが考える以上に重要な教養であり、コミュニケーションの手段であって、もっといえば日本人の「心」というものを伝承していくための大切な方法だと考えていたんですね。

和歌の文化を担っていたのが、藤原氏を中心とした貴族とともに、内裏に住む女性たちでした。まとめて「女房の文化」といいます。宮廷はいわばこういう女性たちの※サロン社会でもあり、その女性たちが和歌で競いあっていた。もちろん男性貴族たちも同じです。天皇であろうが皇太子であろうが、和歌の上手下手が人間評価に直結していました。

だから、百人一首でも有名な在原業平という人物は、出身は下級貴族で社会的にはうだつがあがらなかったのに、その和歌が女性の心も男性の心もつかんで、日本人の永遠のヒーローの一人として物語や能の主人公になっていったんです。プレイボーイ第一号だなどとも言われます。

さて驚くべきことに、女房たちは日本の文字文化革命もおこしていきます。なんと漢字の形を元にして、日本独自の「仮名文字」をつくってしまった。

④もともと和歌、すなわち「ウタ」というものは漢字がやってくる前から日本人がかわしあっていたものでしたから、当然、漢字が入ってくると、それまで口述してきたウタを漢字で表そうという試みがすぐに行なわれました。

音読みの漢字に当てあわすということをした。

D、「あ」という文字は「安」と書き、「き」は「伎」、「か」は「加」、「ぜ」は「是」というふうにして「安伎加是」と

書いて、「あきかぜ」（秋風）と読ませるわけですね。日本で最初につくられた和歌集である『万葉集』は、すべてこのような文字で書かれています。そこでこのような当て字のことを、さっきも言ったように「万葉仮名」と言います。文字は漢字だけど、あくまで

日本語として読むことのできる言葉です。

宮廷の女性たちもこの万葉仮名をつかって和歌を記していたんですが、だんだん手馴れてくるとくずし字で書くようになり、やがて漢字の骨格だけとか部分だけをパートアップして書きはじめ、ついには今日のような、仮名文字を創り出していった。「以」から「い」へ、「呂」から「ろ」へ、「波」から「は」へというようにですね。

これこそ日本人が初めて独自につくった文字であり、当時は「女手」とよばれていました。まさに「I」でした。

平安時代は、このようにして女性たちの文化が大きく開花した時代です。『枕草子』を書いた清少納言も、『源氏物語』を書いた紫式部も、内裏社会に生きる女房とよばれた女性たちであり、女性たちが自分たちの文字をもったことによって、⑤あのような傑作が書かれていったわけですね。

そのうえ清少納言も紫式部も、中国の詩についても漢文についても男性顔負けの知識をもっていました。たとえば『源氏物語』には白楽天（白居易）の漢詩のイメージがいっぱい散りばめられています。社会的には圧倒的に男性優位の時代でしたけれど、このように文化面では宮廷内外の女性が男性を圧倒していたんですね。

もちろん、男性たちもそのことはよく理解していました。もっといえ、女性たちが仮名文字をつかって書いていることは、男性たちが漢字を駆使して書いている文書的な世界にはないものを表現しているということがわかっていた。

そこで、紀貫之のような当時の一級の文化人が、女性のふりをして仮名文字だけで『土佐日記』という日記文学の傑作を書くということもおこります。当時は、日記は男が漢文で書くものだったんですね。⑥貫之はそれを女のふりをして仮名で書いた。「男もする日記といふものを、女もしてみむとてすなり」というのは、このことですね。いわば文化的な※トランスジェンダーです。このように何かのふりをして文芸をしたり芸能をすることを「仮託の編集」とか、また「もどき」といいます。

私は、紀貫之こそが日本で最初で最大のジャパニーズ・エディター（和風化の担い手）だったと考えています。⑦その紀貫之が編纂した平安時代最大の勅撰和歌集である『古今集』に、漢文による序文と、平仮名による和語を駆使した序文の二通りがつけられていることをとても評価しています。漢文の序を「真名序」、仮名文の序を「仮名序」といいます。

これは日本人がようやく漢文化と和文文化を並列しながら自在に扱うことができるようになったということの意味する大事件なんですね。しかもそれは男性社会と女性文化を同列に扱って、いわばジェンダーを超えて、日本人の独自の文芸を極めようとした編集成果だったともいえるわけです。

こうして女性たちの側も仮名文字を駆使して、すばらしい日記を書きはじめた。『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『更級日記』『紫式部日記』などが有名です。

ところで、こういった女性たちの書く日記や和歌には、つねにある共通した感覚が表現されていました。それは、はかないもの、ささやかなもの、小さなものを愛おしむ感覚です。それを「あはれ」とか「もののあはれ」とか言います。

とりわけ、その感覚を集大成していたのが、『源氏物語』です。「あはれ」はどういう感じかはわかりますね。ちよつと※フラジヤイルな共感をともなう気分のことですね。

では、「もののあはれ」の「もの」ってなんだかわかりますか。

もともと日本では「もの」という言葉に、二つの意味をこめていたんです。ひとつは「物」という意味。もうひとつは「霊的なもの」という意味。※スピリットのことも「もの」と呼んでいたんです。「霊」という字も「もの」と読みました。「もののあはれ」の「もの」がまさにそれだったんですね。「ものすごい」「ものがなし」「ものさびしい」とか、関西弁で「ものごつつう」とかいうときの「もの」もそうです。

古代の日本では、目に見えないけれどもこういった霊的なものが、巷にあふれ飛び交っていると信じられていたんですね。何かをふいに思いついたり、誰かから音信が届いたりするときには、このような「もの」がそこに媒介しているのだと考えられていた。魂や心にくっついていると感じられていたんです。ものおとというのも、たんなる物の音ではなく、そういう気配の音のことなんです。

そういった「もの」の気配を感じていきながら、「もの」を語る、あるいは「もの」になりかわって出来事を語っていくことを、「もの・かたり」Ⅱ「物語」と言った。だから当時の物語を読むときは、「もの」にひそむ意味を大事にしたほうがいいわけです。

ずっと時代を下って、江戸時代に本居宣長という人が、『古事記』や『源氏物語』をつぶさに研究をして、そこから日本人本来の心のありかたをさぐり、中国製ではない、日本独自の学問を打ちたてようと思いました。これは「国学」というものです。日本人のための日本の学問という意味です。

このとき宣長がこれこそ日本人の心である、魂であると言ったのが、⑧「もののあはれ」という感覚です。そして『源氏物語』こそがその「もののあはれ」によって描かれた日本で最高の物語であるとした。

諸君も友人や彼氏とうまくいかないことがあると、何か胸が痛くなったり、せつなくなったりしますね。王朝人たちも、男女の恋のはかなさや、人の生死のむなしさを今日のわれわれ以上に鋭敏に感じていたわけです。でもそれは彼氏とうまくいかないからだ

というのではなく、雲や花や水の流れがうつろっていくさまを捉えて、それを「もの」がはかなくなったり、せつなくなったりしているんだというふうに見ました。そのように、人間世界もうつろいやすいものなのだ、と感じたわけです。そのような感覚が「ものあはれ」です。

こういうことはとうてい漢文ではあらわせない。「あはれ」とか「もの」といった日本独特の言葉でなければなかなか表現できないことです。だからこそ平安時代の女性たちは、仮名文字を使って、自分たちの心がとらえた「ものあはれ」を歌にし、物語にしていったんですね。

それを紀貫之が真似をしたわけだし、本居宣長はこれこそ日本人が本来持つべき魂である、学ぶべき「古意」とか「やまごころ」であるとしたのです。

いまは「やまごころ」というと、男たちの勇ましい心意気をあらわす言葉になっていますが、本来はそうじゃなかった。女性たちが、日本の言葉と文字で育んだ「ものあはれ」という感覚こそが「やまごころ」だったんです。これはぜひ胸にとどめてほしいことです。

—松岡正剛『17歳のための世界と日本の見方 セイゴ先生の人間文化講義』による—

(注)

※華夷秩序：中国の王朝を世界の中心に位置づける中華思想に基づき、諸外国と結ばれた関係性。

サロン社会：「サロン」とは貴族階級の社交的集まりのこと。

トランスジェンダー：生物学的性と性自認が一致していない人。「ジェンダー」とは社会的・文化的に形成される性別。

フラジャイル：もろい。はかない。弱い。

スピリット：霊。

問一 傍線部①「やはりどうしても浮上してくるのが文字の問題でした」とあるが、どのようなことが問題なのか。次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 法体系や行政制度を進めるために文字が必要とされたが、日本では漢字に頼らざるをえなかったため、なかなか国の体制が整わなかったこと。

イ 法律や人事を決定するために文書通達が必要だったが、日本人はそのための独自の文字を持っておらず、中国から入ってきた漢字に頼るしかなかったこと。

ウ 古代日本国家は中国のしくみにならって法体系や行政制度をつくってきたが、漢字でそれらを進めるしかなかったため、一部のエリートだけしか関われなかったこと。

エ 国の体制が整ってきたにもかかわらず、日本には独自の文字がなかったため、日本の社会や文化は「仮」のものであるという通念が定着してしまったこと。

問二 傍線部②「真」と同じ意味で用いられている熟語を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 真紅 イ 真顔 ウ 純真 エ 真偽

問三 傍線部③「でもじつはく使い分けていたんです」とあるが、どのように使い分けていたのか。当てはまらないものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 中国の漢字を使っていたが、漢文を中国語でなく日本語の音で読み下したこと。
- イ 政治は中国風デザインの朝堂院で行われたが、生活の場は純和風であったこと。
- ウ 朝廷では漢字能力が必須だったが、内裏では和歌の能力が求められていたこと。
- エ 『万葉集』は漢字を使って書かれたが、『枕草子』は仮名文字で書かれたこと。

問四 空欄 A 〓 D に入る語を次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか選べない。

- ア しかし イ すなわち ウ だから エ たとえば オ まず

問五 傍線部④「もともと和歌、すなわち『ウタ』というものは」とあるが、ここで「ウタ」と表記しているのはなぜか。次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 和歌と歌が同一のものだということを簡単に示そうとしたから。
- イ 漢字伝来以前であることを意識して音で示そうとしたから。

- ウ 「和歌」と「歌」を混同しないように違いを示そうとしたから。
エ 「宇多」と万葉仮名で書くよりもわかりやすく示そうとしたから。

問六

I

に入る語句として適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 仮名文字 イ 万葉仮名 ウ 女性が書く文字 エ 日本人の文字

問七

傍線部⑤「あのような」が指す内容として適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 当時「女手」とよばれていたもの イ 女性たちの文化 ウ 内裏社会 エ 『枕草子』や『源氏物語』

問八

傍線⑥「貫之はそれを女のふりをして仮名で書いた」とあるが、それはなぜか。次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア トランスジェンダーとしての挑戦をしたかったから。
イ 漢文がすたれ、仮名文字に代わる時代だったから。
ウ 文書的な世界にはないものに興味があったから。
エ 性別を隠すことで神秘的な作品にしたかったから。

問九

傍線部⑦「その紀貫之が編纂した平安時代最大の勅撰和歌集である『古今集』」とあるが、『古今集』の意義を文中の語を使って二点答えなさい。なお、勅撰和歌集とは天皇または上皇の命によつて編纂された和歌集のことである。

問十 傍線部⑧「『もののははれ』という感覚」とあるが、それはどのような感覚か。文中の語を使って五十字以内で説明しなさい。

問十一 次の(1)～(4)について、本文の内容に合うものは○、そうでないものは×でそれぞれ答えなさい。

- (1) 古代から江戸時代までの日本の中国至上主義の考え方は、現在のアメリカ至上主義の考え方とは似て非なるものである。

(2) 和歌の文化を担っていたのは内裏に住む女性たちであり、男性は政治中心の生活を強いられ和歌を詠むことは少なかった。

(3) 古代の日本には、目に見えない霊的なものが飛び交っていたが、現代ではそのような存在は否定されている。

(4) 日本人の心、魂である「もののあはれ」は、日本独特の言葉でなければなかなか表現することはできない。

〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

主人公の「小鳥の小父さん」と呼ばれている男性には鳥好きの兄がいた。その兄が亡くなった後、たまたま助けたメジロを飼うようになり、兄との思い出に浸るように生活を送っていた。そんなある日、飼っているそのメジロの声に誘われ一人の男が家を訪ねてきて、そのメジロを譲ってほしいと言った。「小父さん」は譲る気はなかったが、その男の誘いにしたがって車に乗って出かけた。

お兄さん以外で、これほど小鳥に夢中になっている人物と出会うのは初めてだった。もちろんお兄さんと男とでは、小鳥とのつながり方が全く異なっていたが、それでも男が彼なりの方法でメジロに思いを巡らせているのは確かだった。

その時小父さんはふと、車の振動の隙間を縫って伝わってくる、荷台からの気配に気づいて後ろを振り向いた。そこには天井にまで届く大きな荷物が詰め込まれ、黒いぼろ布で覆いがしてあった。何気なく小父さんが布の縁を持ち上げた瞬間、

「触っちゃ駄目だ」

と思いがけず強い口調の声が返ってきた。慌てて小父さんは布を元に戻した。

「光を遮っておかないと無駄に鳴くから、①いざっていう時、いい声が出ない」

「すみません」

「現地に着いてから徐々にウォーミングアップしてゆく。そここのところの調整が微妙なんでね」

「これ、全部、メジロですか？」

「そう。十六羽」

鳴き合わせ会に行くのだからメジロを連れているのは当然なのだが、その数の多さとあまりの静けさに驚いて小父さんはまじまじと荷台を見やった。籠をブロックのように積み重ねているらしく、それらはバランスを保ちながら限られたスペースに絶妙に納

まっていた。

「こんなに大人しくしてられるのですか」

「移動用の小さな籠に入れて真っ暗にしておけば、いい子にしてるよ。まあ、これも②訓練の賜物だな」

それから男は、丁度いいタイミングで鳴かせるための合図が上手く伝わり、人間とメジロの気持がぴたっと重なり合ったようになる時の快感について語りはじめた。その話はどこまでも長く続いてゆき、いつしかかつて育てたチャンピオンたちの自慢話に移っていった。その間十六羽のメジロたちはカサリとも音を立てず、ぼろ布の下でじっと息を殺していた。

四十分ほど走ったところで車は川沿いの道を外れ、しばらく農道を進み、高速道路の高架下をくぐったあと、雑木林になった小高い丘を中腹まで登って停まった。そこには思いの外ひらけた空き地が広がっていた。周囲には所々、金属パイプや鉄線や角材が無造作に積み上げられ、資材置き場になっているようでもあったが、雨ざらしになったそれらはきちんと管理されている様子はなく、どこかしら荒れた雰囲気漂っていた。

【中略】

少しずつ集まってくる人は増え、それに合わせてメジロの密度も高まっていった。どういうわけか皆、男と同じくらいに年格好で、似たようなくたびれた服を着ていた。相変わらず日差しは頼りなく、空は薄い雲に覆われ、風がクヌギの枝を揺すっていた。男は会のスタートに合わせ、微妙な調整に入ったらしく、神経質にぼろ布をめぐったりまた被せたりしながら、メジロたちに水を与えていた。その間にも、今年の鳴き合わせ会でのパツとしない成績や、不調の原因分析や、期待していた一羽が病死したショックについて喋っていた。ますます小父さんは手持ち無沙汰になり、相槌を打つのさえ面倒になってきた。あたりには男たちのざわめきがあふれ、それが風と一緒に渦を巻いていた。これほどたくさんメジロがすぐそばにいるというのに、③心が弾むどころか逆息が詰まりそうだった。そのうえ久しぶりに頭までが痛くなりはじめていた。お兄さんとの※架空旅行の時にはいつでも④抜かりのない準備をしてきたのに、なぜ肝心の葉も湿布も持ってこなかったのかと、小父さんは悔やんだ。

やがて鳴き合わせ会がスタートした。

「よし、これにしよう」

あれこれ迷っていた男はようやく十六羽の中から一番状態のいいメジロを見極め、籠を持って空き地の中央に向った。

鳴き合わせ会は小父さんが想像していたものとは全く違っていた。鳴き声を楽しむ、などというのどかな雰囲気はどこにもなく、もつとぴりぴりとして容赦がなかった。誰もが神経を高ぶらせ、一瞬の油断さえ見せず、ひたすら闘争心をあらわにしていた。瞬く間に空き地は彼らの発する空気に閉ざされ、外の世界の音は遮断され、小父さんも否応なくそこに取り残されて逃げ場を失って

いた。

空き地の中央に二本、適度な間隔を空けて杭が打つてある。その先端に対戦すべきメジロの籠が布を被されたまま吊るされる。飼主二人が杭の脇に陣取り、中央に※カウンターを手にした審判が立ち、他の参加者たちがその周囲で輪を作る。審判の合図と同時に、飼主二人は籠の布をはぎ取り、それを腰のベルトに素早く引掛けるやいなや、首からぶら下げていた竹笛を吹き始める。メスの声に似た音を出す笛でメジロをだまし、無理に歌わせるのだ。一続きの歌を先に五回さえずった方が勝ちとされる。模造紙のトーナメント表のとおり、こうして次々対戦が行われる。

小父さんは恐る恐る輪に歩み寄り、一番外側に立つて様子をうかがった。呆気なく勝敗が決まる場合もあれば、延々と決着がつかないこともあり、小父さんにはどちらが勝ったのか区別はつかなかった。またそれを知りたいとも思わなかった。審判は指を立てたり折り曲げたりして何かしらの結果を示していたが、その合図を読み解くのは不可能だった。小父さんに分かるのはただ、メジロたちが皆懸命に歌っているということだけだった。

【中略】素直なメジロたちは、笛の音がすると、小さな頭のどこかに隠れているらしい耳をひくりとさせ、求愛の相手を探すように首をかしげ、体の内からこみ上げてくる抑えようもない導きに従って歌い出した。メスの声が偽物であろうと、審判の手にカウンターが握られていようと、そんなことにはお構いなく嘴を宙に向け、⑤自分が最も美しいと信じる声でさえずった。さえずりは鳥籠の狭い隙間からあふれ出し、数をかぞえたり笛を口にくわえたりしている男たちの手の届かないはるかな高みに舞い上がり、たとえ聞こえなくなってもまだ、透明な結晶になって浮遊し続けていた。

それは小父さんがよく知っている歌だった。お兄さんと一緒に耳を澄ませ、鳴き真似をした懐かしい歌だった。

こうしている間にも対戦は進み、模造紙には赤い油性ペンで線が着々と伸ばされ、負けた飼主には×印がつけられていった。勝負が済むとすぐさま彼らは、舞踏の続きのように軽く身を浮かせつつ腰布を抜き取り、一旦裾をなびかせてから、無駄には一声でも鳴かせはしないという勢いで再び籠を覆った。勝者の舞はより軽やかだった。敗者は露骨に舌打ちをし、地面を蹴り上げ、中には捨て台詞を吐いて小競り合いを起こす者もあった。⑥彼らの怒声とメジロのさえずりは決して混じり合うことはなかった。

いよいよ男の出番がきた。相手はでっぷりと腹の出た、⑦貫禄のある長老だった。心持左足を引きずる歩き方が、余計に威圧感を漂わせていた。⑧勝負は拮抗している様子だった。男は眉間に皺を寄せ、時に甘えるように、時に鼓舞するようにさまざまに変化をつけて笛を吹き、それに対して長老はベルトからはみ出た腹と垂れ下がる布、両方を独自のリズムで揺らしながら体形に似合わない軽やかなステップを踏んだ。朝方より雲は厚くなり、日差しは消え、風がテントをバタバタいわせていた。そのせいかメジロはなかなかさえずらなかった。籠の中で忙しなく飛び跳ねるばかりで、ようやく歌いはじめたと思ってもすぐ、自信がなさそうに嘴を閉

じてしまった。

⑨男の額には汗が浮かび、キヤップが脱げそうになり、長老の足元には引きずった靴底の跡が滅茶苦茶な模様を描いていた。観客たちは腕組みをし、審判が何か合図をするたび「ほー」とため息を漏らした。カウンターが何回を差しているのか、どちらが優勢なのか小父さんには分からず、ただ、鳴きたくなければ鳴かなくていいんだ、と叫びそうになるのを必死にこらえていた。少しずつ頭痛はひどくなっていた。痛みの塊が頭蓋骨の奥へ奥へと潜り込んでゆき、巢を張り巡らし、脳みそをがんじがらめにしていた。

こめかみを何度も押さえてみたが、何の気休めにもならなかった。

たまらなくなつて小父さんは人の輪から外れ、空き地の縁を当てもなく歩いた。出番のないメジロたちが何羽も、籠の中でバタバタしていた。どんなに狭い場所に閉じ込められても、目を囲む白い輪はくつきりと浮き上がり、一分の狂いもなく完全な円を描いていた。中には名前を書いた木札をぶら下げた籠もあった。チョロ、ジャック、ピーチ、トム、チョーク……。どの木札も角が磨り減り、フンがこびりつき、名前は半ば消えかけて読み取るのが難しかった。早々に負けた憂さ晴らしのためか、ビニールシートに車座になつてビールを飲んでいる数人がいた。その隣では二回戦に勝ち進んだらしい誰かが、唾の詰まった竹笛を掃除していた。

男と長老の戦いはまだ終わる気配がなかった。重なり合う観客たちの間から、ずり落ちそうになるキヤップと、揺れる腹がのぞいて見えた。時折、素晴らしいさえずりが響き渡り、どよめきが起こり、また次のさえずりを待つ A した時が流れた。

小父さんは男がライトバンを停めた場所まで戻り、クヌギの幹にもたれかかった。

「歌わなくていいんだ」

小父さんは言った。

「求愛の相手はどこにもいないんだ」

目を閉じ、額を幹に押し当てると、ほんのわずかひんやりして一瞬だけ痛みを忘れられた。まぶたの裏に、家に残してきたメジロの姿が映し出された。止まり木の真ん中で体を丸くし、耳を澄ませて小父さんを探していた。

「どんなに美しい歌をうたつたって、⑩誰も応えてはくれない」

彼の声に気づく者はなく、そこに小鳥の小父さんと呼ばれる一人の老人が立っていることにさえ、誰も心を留めていなかった。

「お前の求める誰かは、ここにはいないんだ。残念だけど」

まぶたの裏のメジロに小父さんはそう語りかけた。それから目を開き、男が積み重ねた籠に近寄り、一つずつ蓋を開けていった。

⑪「A」の強い風が吹きぬけ、砂埃が舞い上がり、それと同時に一段と大きく竹笛が鳴ったが、小父さんの耳には最早何も届かな

かった。メジロたちは蓋が開いたことに最初気づかず、あれ、どうしたんだらう、という表情を浮かべ、出入り口の縁に脚を掛けた。あともまだ用心深く **B** していた。

「さあ、行っていいよ」

小父さんはすべての蓋を開け放った。やがて一番勇気のある一羽が飛び立ち、それを合図にして残りのメジロたちも次々と後に続いた。最初のうちこそぎこちなく羽ばたいていたが、すぐに調子を取り戻し、小父さんの頭上を一巡りしてから、あるメジロたちはクヌギの枝の間でじゃれ合い、あるメジロたちはもつと空の遠いところを目指して去っていった。最後の1羽の翼が雲の陰に消えるのを見届けてから、小父さんは走ってその場を逃げ出した。

誰かが異変に気づいたのか、あるいは対戦に夢中になっている観客たちのざわめきなのか、背後に騒々しい気配を感じながら、小父さんは無我夢中で走った。途中、無造作に積み上げられた誰のものとも知れない鳥籠のそばを通り過ぎるたび、それらの蓋も全部開け、メジロたちが上手く逃げたかどうか確かめる間もなくまた走った。追いかけてくる足音が聞こえるような気もしたが、走り続ける以外他に方法はなかった。丘を下りきるまでの途中何度か転び、掌をすりむき、膝を強打したのに少しも痛みはなく、ただ頭だけが **C** とするばかりだった。

ようやく高速道路の高架下までたどり着き振り返ると、畑の向こうに、木立に囲まれた丘がぼつんと見えた。⑫ **その中で** 男たちが必死になって繰り広げている会のことになど一切構わず、ただ静かに緑をたたえ、そこに横たわっていた。コンクリートの橋脚にもたれて腰を下ろし、小父さんは咳き込みながら少しでも息を鎮めようとした。小父さんを見送るように、丘の上空で一つの小さな点が曲線を描いていた。それがメジロかどうか確かめる術はどこにもなかった。

—小川洋子『ことり』による—

(注) ※架空旅行：以前、旅行の当日にお兄さんが行かないと言い出し旅行を中止にしてから、旅行を想定して準備だけすると

いうスタイルで楽しんできた。

カウンター：動作の回数を数える装置。計数器。

問一 傍線部①「いざっていう時」とあるが、男が考えている「いざ」という時はどのような時か。次の空欄に入る語を文中から探し、五字程度で抜き出しなさい。

() に出場する時。

問二 傍線部②「訓練の賜物」とあるが、これはどのようなことか。次の中から選び、記号で答えなさい。

ア メジロが荷台で騒がないこと。 イ メジロが限られたスペースに納まること。

ウ 男が籠を絶妙に積み重ねること。 エ 男がメジロを上手く鳴かせること。

問三 傍線部③「心が弾むどころか痛くなりはじめていた」とあるが、ここでの小父さんの気持ちを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 男のそばを離れると知らない人ばかりで、あまりメジロの話ができず居心地が悪い。

イ やることがないのにその場から離れられず、周りの闘争心が自分に向くのを恐れている。

ウ 鳴き声を楽しむ雰囲気より勝敗を決める緊張感の強さに、圧迫感を感じている。

エ メジロを虐待している人々を前に、何もできないもどかしさと無力さを感じている。

問四 傍線部④「抜かりのない」・⑦「貫禄のある」の意味として適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

④「抜かりのない」

ア 手落ちがない様子 イ 利益を逃さない様子 ウ 満ち足りている様子 エ 余裕がない様子

⑦「貫禄のある」

ア でっぷり太った イ 威張りくさった ウ 威厳がある エ 上品である

問五 傍線部⑤「自分が最も美しいと信じる声でさえずった」とあるが、小父さんはメジロの鳴き声をどのようなものだと信じているか。当てはまらないものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア お兄さんと鳴き真似をした思い出の声。
イ 透きとおった純度の高いもの。
ウ 人間の闘争心を十分に満たすもの。
エ 人間が鍛えると良くなるもの。
オ メジロ自らの意思で発声されるもの。
カ 人間が楽しむのどかなもの。

問六 傍線部⑥「彼らの怒声とメジロのさえずりは決して混じり合うことはなかった」のはなぜか。次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 負けた飼い主たちの捨て台詞は、対戦が終了してメジロが鳴かなくなった静けさの中に響きわたったから。
イ 勝敗にこだわる飼い主たちと、純粹にメスを求めて美しくさえずるメジロの声はまったく性質が異なるから。
ウ 勝った飼い主たちの売られたけんかを買う様子は、喜びを分かち合おうと鳴くメジロの声を無視してゐるから。
エ 人間と鳥とは理解し合うことはとうてい難しく、お互いの世界で自分に合った生き方をせざるを得ないから。

問七 傍線部⑧「勝負は拮抗している様子」の意味を表している部分をこれより前の文中から十字で探し、「く様子」に続くように抜き出さなさい。

問八 傍線部⑨「男の額には汗が浮かびく滅茶苦茶な模様を描いていた」とあるが、ここからわかる男の気持ちを四十字以内で具体的に説明しなさい。

問九

A

く

C

 に入る語を次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか選べない。

ア ひりひり イ ずきずき ウ じろじろ エ きよろきよろ オ じりじり

問十 傍線部⑩「誰も応えてはくれない」とあるが、それにも関わらずメジロが懸命に鳴くのはなぜか説明しなさい。

問十一 傍線部⑪「一へ」の強い風」の空欄に入る漢字を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 般 イ 氣 ウ 目 エ 陣

問十二 傍線部⑫「その中で」が掛かる文節を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 必死になって イ 繰り広げている ウ 構わず エ 横たわっていた